

## イメージ体験の様態と外在化による変容過程

立教大学 神田 久男

**The aspect of image experience and the modification process accompanying externalization in image therapy**

Hisao KANDA (Rikkyo University)

The purpose of this study was to explore aspects of image experience and the modification processes accompanying externalization in image therapy. After image experience, questionnaires about the image experience and image features were completed by 38 university undergraduates and graduate students (15men, 23women; average age: 23.8years). The image responses were analyzed by 14 original indexes of the image's structure (cluster analysis), and the subjects were divided into three groups: Cluster A(n=17), Cluster B (n=14), and Cluster C (n=7). The features of each group's image experience were as follows. Cluster A is marked by maintenance of experience-distance from the image. Cluster B appears to be experiencing the image profoundly but with a certain level of self-awareness. Cluster C is completely absorbed in the image and is a tendency to lose themselves in it.

**Key words:** image therapy, image experience, externalization, modification process, drawing.

自己像や身体像、それに両親をはじめとするその個人にとっての他者や人間観、世界観などはすべてイメージによって構成されていて、これをことばで表現するときは、内在するそのイメージと照合させながら本人にとって適切と思われることばが選択される。しかもイメージは、単なる外界の現実をそのまま反映した視覚像ではなく、個人に特有の認知様式や複雑な感情体験、意味づけなどをともなった固有の世界を形成している。そして対話的場面でこのイメージを相手に伝えようとするとき、これもまたそれぞれがもつことばのイメージで伝え合っていることになるので、たとえ同じ“ことば”が使われていても、相互間でそのことばに付加されるイメージにズレがあるならば、お互いが充分に理解し合うというのはそれほど容易なことではない。したがって心理臨床の場で、

クライアントをその全体性、個別性において理解しようとするとき、その人の内界に存在するイメージを個人の枠組みや文脈に添ってできるだけ確に把握しようとする取り組みは不可欠の条件となる。

行動療法や認知行動療法などで主に用いられる指定イメージはもとより、イメージ面接やイメージ描画法などで導入される外部からの操作よりも自然な流れに重きを置いた自発的イメージなどは、人間の内的体験における経験的事実として位置づけられてきた。そしてこれを効果的に扱うことによって複雑な、ときには混乱した感情や情動、認知を実感的に吟味して整え、相互の結びつきを理解するとともに新たな認知的枠組みを構成し、より適応的な行動の生起が可能となるような方向づけが試みられる。このような心理臨床の実践にお

けるイメージ・アプローチではまず、クライアントが体験しているイメージの内容、つまり「どのような内容のイメージが想起されているか」が重視される。そこでは本人にとっての象徴的な意味やストーリー性などをともに理解し、また素材の変化やテーマ、モチーフの変遷の過程をとらえていくことで、自己分析や自己理解を深めていくことになる。

そしてもう一点、このイメージ内容と同様に重視されなければならないのが、イメージの体験の様態（体験様式）である。すなわち「クライアントには今、自分のイメージがどのように体験されているか」を適切に判断し、それに対応したアプローチをすることであるが、イメージの内容と同じようにこれも個人差は大きくつねに可変的である。ほぼ同一のイメージ内容であっても、体験の仕方は個人によって、また状況によってさまざまであり、時間的経過によっても推移していく。臨床的には、イメージ体験の様態は、ある意味でクライアントの自己の内面とのかかわり方を反映しているともとらえることができる。

さらにクライアントは面接場面で、自らのイメージ体験をことばや描画などを媒介に表現していくことになるが、この外在化の過程でもイメージ体験は刻々と変化していく。一般に、内的体験の外在化の過程では、心理的体験との間にある程度の距離は維持され表現されていくと考えられている。確かに成功したケースでは、このような過程を通して着実な現実吟味がなされ、自己洞察へと発展していくプロセスをたどることになる。しかしケースによっては、より内的で主観的な感情過程がますます促進されたり、反対に日常的、常識的な概念によって体験が安易にまとめられてしまったりするなど、その変化のプロセスは必ずしも一律ではない。このようなことから、クライアントのイメージ体験の様態をセラピストが適切にとらえ、それに即応した効果的な治療的アプローチがいかにとれるかは、セラピーの成果を左右する重要な要因の一つになっている。

これまでにも、この点に関する研究は事例研究

のなかでさまざまに考察されてきたが、体系的な研究はほとんどなされていない。したがって本研究では、イメージ療法におけるイメージ体験の様態に焦点を絞り、イメージ想起から外在化（今回は描画表現）に至る一連のプロセスでイメージ体験の様態とその変化の過程を明らかにするとともに、それぞれの様態に対応した治療的アプローチについても検討することを目的とする。

## 方 法

### 被験者

本学の学部と大学院の学生、および学外のカウンセリング研修受講生の38名（男子15名、女子23名、平均年齢23.8歳）。3～10名の小グループで実施。

### イメージ体験の評定

（1）イメージ体験尺度：イメージ療法に関する先行研究から、主にイメージ体験の諸側面の機能について論じた増井（1980）、Richardson, A & Taylor, C.C.（1982）、John, B（1984）、田嶋（1987）、水島（1988）、成瀬（1988）、藤原（1994）、福留（2000）、Sheikh, A.A（2002）等の論文を参考に、これに筆者自身のイメージ療法、イメージ描画法を導入したセラピー経験からクライアントのイメージ体験の様態をとらえる観点として重視してきたものを加え、イメージ体験をとらえる指標として14項目を作成した（Table 1）。回答

Table 1 イメージ体験尺度の項目内容

項 目	内 容
1.現実感	現実感を伴っている
2.エネルギー感	内的なエネルギーが感じられる
3.内界親密感	内面の深層に根ざしていると感じられる
4.内界投影感	自分の内面を反映していると感じる
5.有意味感	自分にとって意味深い体験に感じられる
6.意味の多義性	多義的で複雑な意味合いをもつと感じる
7.発展性	可能性や発展性が感じられる
8.対外的再生感	過去の再現や現実の模写といった感じがある
9.感情実感	感情の変化の過程をしみじみ実感していた
10.内的安定感	内面で深い安定がもたらされた感じ
11.統合感	全体としてまとまりと一貫性が感じられる
12.自己帰属感	“自分のイメージ”という実感がある
13.自己親和感	全体として自分でも納得ができる
14.身体感覚	微妙な身体感覚も敏感に感じられた

は“今、現在の気持ち（体験）”として「非常に当てはまる」（5点）から「当てはまらない」（1点）までの5件法で求めた。

（2）**イメージ特性尺度**：体験されたイメージの特性を把握することを目的に、以下の5つのイメージ特性について「とても当てはまる」（7点）から「全く当てはまらない」（1点）までの7件法で評定する尺度を作成した。広義にはこれもイメージ体験に包括できるが、自身が体験したイメージそのものの特性に対する認識に焦点を当てている。

- a. 自律性：イメージの自由で自発的な展開
- b. 流動性：イメージの連続的で自然な流れ
- c. 力動性：イメージのダイナミックな変化や展開
- d. 鮮明性：イメージそのものの鮮明さ
- e. 受動性：イメージの非意図的な展開

#### 手続き

（1）**ウォーミングアップ**：イメージへの導入を容易にするため、練習としてリラクゼーションの後に指定イメージ、即ちイメージ想起が比較的簡単とされる“海”または“高原”をイメージするよう指示し、浮かんできたらそれをそのまま5分ほど眺めていてもらった。この段階でイメージ想起があまりうまくできない被験者には、再度別の指定イメージを試みるか、イメージ想起のポイントをアドバイスした。

（2）**イメージ体験**：閉眼し、自然に浮んでくるイメージ（自発的イメージ）をそのまま受けとめ、その流れや展開にまかせて“あたかも夢を見ているかのように”しばらく眺めているよう指示した。やがてイメージ展開が一段落したり動きがなくなったら自分の判断で眼を開け、その体験をイメージ体験尺度とイメージ特性尺度に評定してもらう。

途中で不安を感じたり、嫌悪感などがでてきたときはいつでもイメージ体験を中止するようにも指示した。

（3）**描画表現**：イメージ体験の中からとりわけ印象に残っている内容、描画として表現してみた内容など、イメージ体験の過程からその内容を

任意に選択し、これを描画としてクレヨンで自由に（枚数も含め）表現してもらった。こうして描画活動に伴いさらに活性化されたイメージ体験を再度イメージ体験尺度に評定してもらう。

ウォーミングアップから描画表現までの時間は、約100分～140分程度。また、全被験者とは一週間後に再び描画を見ながらイメージ体験について語ってもらい、曖昧なままに残されている感情や体験、不明な点について共に話し合う振り返りのセッションを設けた。

## 結 果

### イメージ体験

イメージ体験の様態をその特徴から類型化するために、イメージ体験尺度の各項目の得点を変数（14変数）としてクラスター分析（非階層法）を行った。仮説的には総体としてイメージとの体験的距離が近いものから比較的遠いものといった2類型が想定されるが、構造的な差異、つまり体験内容のなかで感情領域や意味感の領域といった特定の領域で特徴的な傾向を示す群も考慮する必要があると考え、クラスター数を2、3、4、5と変化させて検討した。同時に、すべての被験者に対してそのイメージ内容（ストーリー）についても概観したところ、イメージ内容の構成度の水準やストーリー展開の特徴などについてもある程度の共通性とまとまりが認められたので、最終的には3クラスターを採用することとし、便宜上それらをクラスターA（17名）、クラスターB（14名）、クラスターC（7名）と命名した。

さらに、このクラスター分類が有意であるかどうかを検討するために、各指標に関してクラスターごとの平均値と標準偏差を求め一要因の分散分析を行ったところ、すべての項目で有意な差が見られたので多重比較（チューキー法）を行った。その結果をまとめたのが、Table 2である。

### イメージ特性

イメージ特性についても3クラスター間でイメー

Table 2 イメージ体験各指標の平均値(標準偏差)とクラスター間の比較

項目	クラスターA n=17	クラスターB n=14	クラスターC n=7	F値	多重比較
1.現実感	2.29 (1.05)	3.86 (.95)	2.00 (.00)	14.64**	A<B**,C<B**
2.エネルギー感	2.53 (1.01)	3.43 (1.09)	3.00 (.82)	3.06+	A<B*
3.内界親密感	2.06 (.75)	3.79 (1.31)	3.57 (.79)	12.98**	A<B**,A<C**
4.内界投影感	2.18 (.73)	4.00 (1.11)	3.43 (.98)	15.41**	A<B**,A<C**
5.有意味感	1.82 (.73)	3.86 (1.10)	4.14 (.69)	27.80**	A<B**,A<C**
6.意味の多義性	2.00 (1.06)	2.21 (.97)	3.43 (1.27)	4.58*	A<C*,B<C*
7.発展性	1.94 (.97)	2.71 (1.54)	3.57 (.79)	4.93*	A<C*
8.対外的再生感	2.35 (1.46)	4.14 (.77)	2.00 (.53)	12.97**	A<B**,C<B**
9.感情実感	1.53 (.51)	3.29 (.91)	3.29 (.49)	30.70**	A<B**,A<C**
10.内的安定感	1.41 (.71)	2.71 (1.14)	3.43 (.98)	14.07**	A<B**,A<C**
11.統合感	1.76 (1.09)	3.36 (1.34)	2.86 (1.46)	6.43**	A<B**
12.自己帰属感	2.41 (1.12)	4.36 (1.08)	3.73 (1.25)	11.76**	A<B**,A<C*
13.自己親和感	2.24 (1.25)	3.79 (1.05)	3.86 (.69)	9.65**	A<B**,A<C**
14.身体感覚	1.65 (1.00)	2.71 (1.31)	4.14 (.90)	17.67**	A<B**,A<C** B<C**

\*\* : p<.01, \* : p<.05, + : p<.1

Table 3 イメージ特性各指標の平均値(標準偏差)とクラスター間の比較

特性	クラスターA n=17	クラスターB n=14	クラスターC n=7	F値	多重比較
a.自律性	3.37 (1.37)	4.71 (1.73)	6.14 (.90)	8.83**	A<B+,A<C** B<C*
b.流動性	2.24 (1.29)	2.71 (1.20)	4.57 (.98)	9.67**	A<C**,B<C**
c.力動性	3.12 (1.27)	4.57 (1.70)	5.71 (.76)	9.91**	A<B*,A<C**
d.鮮明性	3.47 (1.50)	5.43 (1.65)	5.57 (1.13)	8.35**	A<B**,A<C**
e.受動性	2.94 (.97)	4.57 (1.44)	5.14 (1.95)	8.26**	A<B**,A<C**

\*\* : p<.01, \* : p<.05, + : p<.1

ジ特性尺度の得点に差があるかどうかを検討するため、一要因の分散分析を行った。その結果、5尺度すべてにおいて有意差が見られたのでさらに多重比較（テューキー法）を行い、結果はTable 3に示した。

### イメージ体験の変容

自発的なイメージに付与されるさまざまに複雑な体験の過程は、その内容を描画という媒体により外在化させることでいかに変容したか、イメー

ジ体験時と描画表現時とのイメージ体験尺度の差を検定（*t*検定）したのが、Table 4である。

クラスターAでは、14項目のうち〈内界親密感〉〈有意味感〉〈内的安定感〉〈統合感〉〈身体感覚〉の5項目で有意な差が認められ、いずれも描画表現時の方が高い。一方、クラスターBは〈発展性〉〈内的安定感〉〈身体感覚〉で有意差がみられ、こちらも描画表現時で上昇している。クラスターCでは〈内界投影感〉のみ描画表現時の方が有意に高かったが、反対に、イメージ体験時より

Table 4 イメージ体験の変容

項目	クラスターA			クラスターB			クラスターC		
	イメージ	描画	<i>t</i> 値	イメージ	描画	<i>t</i> 値	イメージ	描画	<i>t</i> 値
1 現実感									
2 エネルギー感									
3 内界親密感	2.06 (.75)	2.71 (.77)	2.18*						
4 内界投影感							3.43 (.98)	4.14 (.69)	2.50*
5 有意味感	1.82 (.73)	2.35 (.70)	2.50*						
6 意味の多義性									
7 発展性				2.71 (1.54)	3.50 (.85)	2.24*			
8 対外的再生感									
9 感情実感									
10 内的安定感	1.41 (.71)	2.00 (1.12)	2.79*	2.71 (1.14)	3.14 (.94)	2.48*			
11 統合感	1.76 (1.09)	2.24 (.83)	2.22*						
12 自己帰属感									
13 自己親和感									
14 身体感覚	1.65 (1.00)	2.06 (.83)	2.75*	2.71 (.91)	3.28 (.83)	2.28*			

\* :  $p < .05$

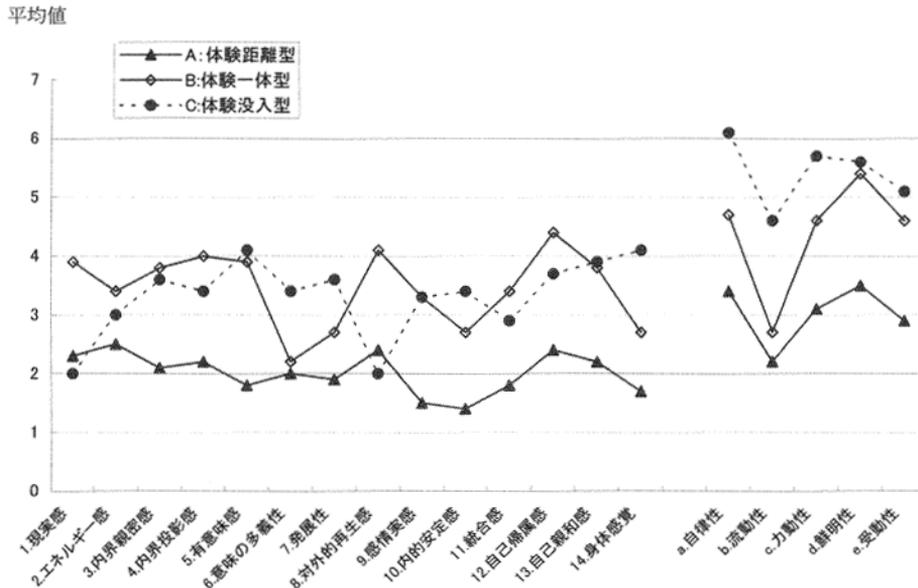


Figure 1 イメージ体験とイメージ特性のプロフィール

描画体験時で有意に得点が低かった項目は3クラスターのいずれにも認められなかった。

## 考 察

### クラスターA 《体験距離型》

3クラスターそれぞれについて、自発的イメージ体験の様態（イメージ体験尺度・イメージ特性尺度）をプロフィールとして示したのが、Figure 1である。

クラスターAは他の群と相対的に比較して、イメージ体験とイメージ特性の両尺度共、ほとんどの項目で得点は低く、総じてイメージとの体験的距離がある程度保たれている、いわば《体験距離型》といえよう。すなわち、イメージ体験尺度の平均得点の多くが2点前後に集中していることから、生じたイメージに対して感情はほとんど付加されず、自己の内面が投影された意味あるイメージ展開というよりも、ただ断片的に浮んでくるイメージを眺めているといった傾向が顕著で、身体感覚に乏しく、内的な安定感や全体としてのまとまり、一貫性はそれほど実感されていないことがうかがえる。この傾向はイメージ特性尺度でも同様に認められ、イメージの自然な流れに任せると

いうよりも意図的に統制しているという意識をもっている反面、鮮明性の得点は低い。したがってこの群では、イメージとの体験的距離の持ちかたから推測されるほどには現実感を伴っておらず、日々の内的生活が活き活きと反映された鮮明なイメージではないことがわかる。

しかし、そうしたイメージ体験であっても、その内容を描画を媒介に表現していく過程ではいくつかの側面で明確な変化が認められた。たとえば〈内界親密感〉〈有意味感〉は明らかに上昇していて、イメージはしだいに内面の深層に根ざした意味深い体験として感じられるようになっていることがわかる。さらに〈身体感覚〉への感受性も高まっていて、これと並行して〈内的安定感〉と〈統合感〉は以前にも増して実感されるようになっている。イメージを描画という手段で表現していくということは、その内容をことばだけでは十分に伝えきれないような曖昧さや微妙なニュアンスをも含めて視覚的に表現していくことを可能にする。しかもそこには絵を描くという身体活動も伴っているので、心身の自然なリズムはそのまま活かされやすい。それゆえに、たとえ初期の段階では自発的なイメージの流れにそれほど浸ることなく、

一定の体験的距離が保たれたままに推移したイメージ体験であっても、描画活動という創造的な手段によってこれを外在化させていく過程では、そこからさらに深い感情や意味が実感されたり新たなストーリーが生成されるなど、それまでのイメージはしだいに活性化されるようになり、いわゆる「体験に伴う自律性の感覚」(吉良, 2002)は一層機能するようになっていったと考えられる。

例えばある被験者は、「赤い球体が浮んできたので眺めていると、いつの間にかそれがサッカーボールに変わり、傍らにサッカー選手が立っている。やがてそれは海の中で魚のようなものに変化し、夕日が眩しい水平線の向こうに消えていった」とイメージ体験はイメージの展開を傍観者的に眺め、記述的に語れるような内容のとらえ方であった。ところがこれを描画として表現していく過程で、赤い球体は「濁ったどす黒い血の色」となり、サッカーボールや選手の登場は「少し自分に意図的なものが働いていた」ことに気づいてくる。そしてあの魚のような生き物は、「白いイルカの子ども」であり、それが水平線の向こうに消えていったとき、「自分は落ち着いた気分で夕暮れを眺めていた」というストーリーに変化している。

この群にとって、ことばや描画などによる外在化の過程こそがイメージ体験をさらに活性化させる活動になっていることがわかる。したがってセラピーでも、クライアントの体験内容の概念化や理解だけに留まることなく、相互の関係性から新たな展開を一層促進させ、クライアントとともに自己理解を深めていけるような柔軟なアプローチがセラピストには求められる。

#### クラスターB 《体験一体型》

たとえ体験されたイメージが複雑な感情が重層的に付加された前概念的な要素や構造の未分化性を多く包含していたとしても、体験の主体がこれに翻弄されることなく、むしろその流れに任せて内的に生起している事象を敏感に感じ取り、把握できているとしたら、それは自身にとって自己理解を促進させる有効な体験となる。

この群では、〈内界親密感〉〈内界投影感〉それに〈有意味感〉が高く、内面の深層を反映している意味深いイメージとして体験しているとともに、それらはまさに“自分のイメージ〈自己帰属感〉”であるという実感をもって納得されている〈自己親和感〉。加えて、〈現実感〉〈対外的再生感〉の平均得点は他の2群と比較して著しく高く、イメージの内容はけっして現実の生活から遊離したものではなく、現実感を伴っていて現実検討力は高く保たれている。一般にこのようなイメージは単に過去や現在の経験の再現、模写といった特徴を備えていることが多いが、イメージ特性尺度の〈自律性〉〈力動性〉、それに〈鮮明性〉〈受動性〉得点も高く、自らのイメージは鮮明で、あえて意図せずとも自在に湧いてきてはダイナミックに展開していったととらえられていることがわかる。すなわち、現実検討力は適度に維持されながら、象徴的な意味合いの多い豊かな内容が展開されたバランスのとれたイメージ体験《体験一体型》といえよう。

そこでさらに個別的にイメージの体験内容を検討してみると、もっとも特徴的なのは約7割近くのものから視覚以外の感覚のモダリティーが報告されている点である。例えば、「柔らかな鳥の羽の触感」「素足で濡れたコンクリートの上を歩くときのザラザラとした肌触り」「陽だまりの匂い」「朝露に濡れた草を噛んだときの味わい」など、これらはイメージ体験の構成要素としてかなり重要な刺激となっているが、これによってイメージ展開が決定的に方向づけられたり阻害されたりしているわけではない。むしろそうした要素は、イメージをより多面的、多次的に体験することを可能にし、その活性化に向けて促進させるような機能を果たしている。

この傾向は描画表現時でも弱まることはなく、むしろ〈発展性〉〈内的安定感〉〈身体感覚〉の項目では上昇している。身体の微妙な感覚も一層敏感に感じ取れるようになり、イメージ内容にさらなる可能性や発展性を実感できるようになることで安定感もたらされている。その意味でこうし

た過程は、《体験距離型》のようにイメージ想起時の体験が外在化によってさらに発展していったというよりはむしろ、イメージ体験が描画という活動によって自身の内にバランス良く内実化され、着実に定着していったプロセスとしてとらえることができる。したがってセラピーにおいても、当面はクライアントのイメージ体験をいかに内実化させていくか、この点にポイントを置いたアプローチを維持していくことが治療的な意味をもつことになろう。

### クラスターC 《体験没入型》

クラスターCの体験プロフィールは、一見クラスターBとかなり似かよっている（最終クラスター中心間の距離：3.756）。しかしそれだからこそ、両群間の差異に焦点を絞って検討していくことで、その基本的な特徴は浮き彫りになってくる。

イメージ尺度では、〈現実感〉〈意味の多義性〉〈対外的再生感〉〈身体感覚〉を除いた10項目で《体験一体型》とは有意な差は認められない。このことから自己のイメージは内面の深層に根ざしたものであり、自分の世界が如実に反映されたものとして意味深く感じられていることになる。ところが〈現実感〉と〈対外的再生感〉は3群の間で最も低く、体験されているイメージ内容は「暗い海の中」や「フワフワの空の上」「眩しい光」といった日常の現実関係から一歩退いた抽象度の高い状況のなかで展開されていて、リアリティーはそれほど感じられていない。また〈意味の多義性〉〈身体感覚〉の得点も低いことから、全体を通して「闇の中の漠然とした恐れ」とか「陽光につつまれた暖かさと至福感」「朝露の冷たさ」などのように特定の感情や感覚に影響を受け、それへのとらわれが強いためか、イメージの展開に深くかかわってはいるものの身体感覚への感受性は乏しい。一方、イメージ特性尺度では〈自律性〉と〈流動性〉の得点が突出して高く、イメージはダイナミックに、しかもつぎからつぎへと展開していったと認識していることになる。ただ、これにイメージ体験尺度の特徴も加味して考察すると、

被験者はイメージの自然で柔軟な流れを主体的に実感していたというより、イメージの展開にやや圧倒され、ときには翻弄されてしまうような傾向もあったことが推測される。

すなわちクラスターCは、《体験一体型》と同じように容易には言語化しがたいような前概念的イメージを体験し、それに伴う複雑な感情も深く感じ取ってはいるが、しばしばその展開に埋没し流されてしまい、ときとして現実感覚や主体感覚が希薄になる傾向がある、いわば《体験没入型》ということができよう。しかもその傾向は、描画活動時にまでほとんどそのまま引き継がれている。本来、前概念的で自律的に展開されるイメージは、それだけ深い内面をヴィヴィットに体験できる可能性を示唆している。しかし、そうした概念化されにくいなまの感情に即したイメージばかり経験しているということは、その体験そのものや自己の内的変化に対する意味づけを引き延ばさせ、統一のとれない思考や不安定な感情状態をいつまでも継続させてしまうという危険性もはらんでいることになる。

したがって《体験没入型》イメージへの治療的アプローチでは、漠然とはしていても強く実感される感情の流れや前概念的思考が主流となったクライアントのイメージ体験を、セラピストがともに共有していかなければならないことは当然のことである。ただしそれ以上に重視されなければならないのは、さらにそうしたクライアントの体験をいかにして現実の文脈の中に位置づけていくかであり、そのためにはこれを一つひとつ本人の実生活の体験と照合し、内容を吟味し、概念化・客観化していく作業がなによりも必要になってくる。

### イメージ体験の外在化について

あらゆるセラピーにおいて、イメージ療法にせよイメージ描画法にせよ、何らかの形でイメージを媒介にした自己表現を導入するならば、その内容や経験を伝えるためには何らかの具体的な表現手段が必要となり、多くの場合それはセラピストとのことばによる対話や描画といった芸術的表現

などによって外在化される。こうした外在化の過程でクライアントは、自分の内面を見直し、吟味し、概念化するとともに、そこからさらに刺激されて新たなイメージ展開が生まれたりするが、それがこれまでとは異なった側面から自分をとらえなおし、再構成していく契機にもなりうる。本研究でも、イメージ体験時より描画表現時でイメージ体験尺度の得点が有意に低下した項目は認められず、描画による外在化によって内的活動水準は維持、さらには活性化されていたことが裏づけられた。

そこではもともとのイメージ体験の内容や質の一部が省略されたり、いくつかの要素が一つに凝縮されたり、別の新しい要素が付け加えられたりもする。そもそもイメージ的なものをことばや視覚的なものに還元しようとするならば、それはどうしても説明的になることは避けられない。出来事や体験に含まれる複雑な内的感情や心の働きを表現しようとするなら、同時に並存している複数の要素には順序関係が生じてくるのであって、元の体験はどうしても変形されざるをえなくなる(森岡, 2002)。また、イメージ体験をセラピストという他者や描画という対象に表現しようとするならば、それとの相互交流から自らの体験に固有の意味とまとまりが付与されたり、ストーリーはそこからさらに展開し新たなものが生成される(S. McNamee & K.J. Gergen, 1997) というのはごく自然の成り行きである。したがって、イメージ体験の外在化の過程を検討しようとするとき、クライアントのイメージ体験の様態だけではなく、クライアントとセラピストの相互関係性やこれらの要因をことごとく包括した丹念な事例的研究は不可欠であり、この点についても今後並行して検討していく。

## 引用文献

- 藤原勝紀 1994 三角形イメージ体験法に関する臨床心理学的研究：その創案と展開 九州大学出版会
- 福留瑠美 2000 イメージ体験が繋ぐからだと主体の世界 心理臨床学研究, 18, No.3, 276-287.
- Johon, B. 1984 Art therapy as a form of psychotherapy. In D. Tessa (Ed), *Art as therapy*. Tavistock Publications.
- 増井武士 1980 イメージ・セラピーの基礎的研究 成瀬悟策編 イメージ療法：催眠シンポジウムX 誠信書房
- McNamee, S. & Gergen, K.J (Ed) 1997 *Therapy as social construction ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践* 金剛出版
- 水島恵一 1988 人間性心理学体系9：イメージ心理学 大日本図書
- 森岡正芳 2002 物語としての面接：ミメーシスと自己の変容 新曜社
- 成瀬悟策 1988 自己コントロール法 誠信書房
- Richardson, A., & Taylor, C.C. 1982 Vividness of mental imagery and self-induced mood change. *British Journal of Clinical Psychology*, 21, 111-117.
- Sheikh, A.A. (Ed) 2002 *Handbook of therapeutic imagery techniques*. イメージ療法ハンドブック 誠信書房
- 田嶋誠一編 1987 壺イメージ療法：その生いたちと事例研究 創元社
- 吉良安之 2002 主体感覚とその賦活化：体験過程療法からの出発と展開 九州大学出版会